



## 私たちの研究室

# 大江 秋津 研究室

経営学部 経営学科 准教授

おおえ あきつ  
大江 秋津 先生



ゼミに集まった学部3、4年生と大江先生

## 人の活動をデータで解析し、 新しい発見をする組織学習論

組織は人の集合体であり、人そのものでもある。経営学の研究分野の1つに、その組織を「あたかも人のように様々なことを学習するもの」ととらえて研究する組織学習論がある。

### 組織の面白さは、人が集合することにある

「人は目的のないウインドウショッピングで見つけたものを購入することがありますが、組織でも新しい技術を探し、興味を持った会社と事業を起こすことは同質の行動と言えるのです」と大江秋津先生は言う。

ただ、組織はアクションを1つに揃え、複数の人間をまとめ上げることが難しく、そこに組織学習論の面白さがある。組織学習論には様々な手法があるが、大江先生はIT系コンサルタントとしてプロジェクトマネジメント分野で活躍した経験を活かし、マネジメント理論や組織論、データ解析、統計などを駆使するマクロ視点からの研究を行っている。

組織学習とは、組織内にある成功事例、失敗事例、知識などを集約してノウハウをまとめて全員に還元し、その知見を組み合わせることでイノベーションに昇華させ、それを常にアップデートしていくものなのだ。

### プロジェクトマネジメントの仕事は「標準化」

「IT業界で私に求められたのは、システム開発の途中で混乱したプロジェクトを整理し、成果が出せるよう組み立て直すことでした。多い場合には100人に

もなるプログラマーやSEが分担作成したプログラムを、あたかも1人で書いたかのように「標準化」してメンテナンスや自動化できる部分を調整し、全てをトータルコーディネートし直します。そのために様々なデータベースを作成、共有し、標準化ツールとして活用する手法をとってきました」と話す。

大学の研究室でも研究内容を含むあらゆる関連情報をデータ化した研究標準化マニュアルを構築し、院生も含めた総勢48名の学生が研究に活用している。

学生はこの資料を見ることで、英語論文の書き方、海外の専門誌への投稿の仕方など、研究に関するほとんどのことがわかるようになっている。コンサルタント時代にやってきたことと基本は同じなのだ。

### ゼミ活動と組織学習論における歴史学的研究

大江研究室の学部3年生向けゼミ授業は週1コマで、前期は統計分析を学び、筋道の通った仮説を設定し、自身でデータを集めて重回帰分析をし、自分なりのレポートをまとめる。後期はグループごとに英語論文を読み、その研究の問題点と良い点を考え、自分が研究を引き継ぐなら、次にどんな研究をしたいかを議論し徹底的に考える。これを毎週繰り返しながら、4年生の卒業研究の計画書を作成する。

4年生の卒業論文テーマは、マクロ的な組織学習論であること、仮説を立てて実証する「実証研究」の手法をとること、の2つを軸としていけば、個別テーマは自由に選ぶことができる。



学部3年生のグループディスカッションに4年生も参加

大江先生の研究は幅が広いことにも特徴がある。その一つが継続的に続ける「日本の自動車関連産業とその海外拠点」に対する研究だ。毎年海外への調査訪問を通じて生まれた仮説をもとに、公開された企業のデータを収集・分析し、本社から自立した海外子会社が生み出される仕組みを解き明かそうとしている。

また、長期にわたる年代比較の研究も興味深い。

「これまで経営学において年代比較の手法は、遑っても10年程度前との比較が中心でした。しかし、私は100年、200年、300年前の出来事により、現在の我々の行動や選択などが影響を受けていると考えています。例えば、過去に戦争を乗り越える経験をした企業は次の戦争でも生き延びる可能性が高いが、豊かな時代に生まれた企業はその経験がないため戦時には倒産しやすいという考え方です。100年単位のデータを集め、分析する研究で、海外では動きが活発化しています。当研究室はすでにこの研究に取り組みはじめ、科研費の支給を受けることもできました」と話す。

### 藩校の研究、地理空間加重回帰解析と組織学習

近年の経営学では歴史学的研究がホットな対象になっており、最近では『藩校』の研究が一番の興味対象なのだ大江先生は話す。

その研究に『遊学における公費と私費負担が外部知識ネットワークに与える影響』がある。ここでは全国にあった藩校を対象に、人材育成が私費と公費（藩費）の違いで外部知識ネットワークにどんな影響を与えているか比較し、評価を行っている。

研究は、1 はじめに 2 理論と仮説 3 データと分析手法 4 結果分析 5 考察、の5項目で構成される。この形はデータ分析研究の基本型でもあり、学生の作成する論文にも踏襲されることになる。

大江先生の研究が興味深いのは、ここに「地理空間加重回帰分析」という手法を導入していることだ。歴史学では資料が見つからない推論は根拠がないことになるが、経営学での大江先生はGPSデータなども使

## 9 地理空間加重回帰分析のまとめ



【図】地理空間加重回帰分析

い多角的なデータ分析を導入することで、その隙間を埋めようとしている。

この研究では組織同士の地理空間的影響を考慮した統計分析により実証しようとするのがポイントになる。【図】は、このまとめの分析であり、「私費、藩費のどちらが多いかで、藩の取り組み姿勢がわかる。年代によって地域の中に大きな流れが生じ、それが動いていくことも見え、幕末に向かって藩が感じている動揺や必死さといった感情が読み取れる」と話してくれた。

### 厳しい授業の中に、温かさがある

学部生の岡本育美さんは、「大学は純粋に勉強できる最後の機会なので、経営学を目いっぱいやって社会に出ようと思い、厳しい研究室を選びました。先生はとにかく知識欲が強い方です。また、学生と一緒に考えようとしてくださるので、研究室のお母さんの存在だと思っています」

久留島弘章さんは「経営コンサルタントになりたいと思い、ここを選びました。先生の経験を元にした指導は本当に勉強になりました。卒論に江戸時代をフィールドとして選び、当時の人になりきって考えたことで、物事に深く関わって思考することを学びました。『なんでそんなところにつながるのだろう』と思うような先生の気付きに、いつも驚いています」

吉本晶さんは「私は起業に興味がありましたが、この研究室で学び、起業する人を支える仕事にも興味湧いてきました。海外援助のために働きたい思いもあります。研究室では『恩は天下の回りもの』と言われ、上級生からもらった恩を同級生や後輩たちに返していく、優しさのつながりがあります」と話してくれた。

太田 正人（ジェイクリエイト）